山崎郷土報

NO. 113
21.4.18

兵庫県宍粟市教育委員会
社会教育課内
山崎郷土研究会
電話63－3000

神谷ばなし（一）

森本　一二

さあ、みんな来なさい。
おじいさんが　神谷の昔話をしますよ

第一話・都がなる、伊和の里

むかし昔、まだ山や川の名前もない大昔、一人の神様がやって来て国造りをなさいました。その神様の名前を伊和の大神と言います。

神様は、西の出雲（島根県）の方から、東へ東へと国造りをされてきたのです。国造りというのは、そこにすんでいる人達を教えて田畑をつくらせ、作物の種をまかせて生活を豊かにして、新しい国を作ることです。

伊和の大神が、この揖保川の上流へやってこられて、一番気に入られたのがこの神河の地でした。そこでまず、神谷の奥にある高い山に登って国見をされると、目の下に岸田、五十波の広い平地があり、南には山崎や城下の盆地が一目にみえ、北を見ると一宮町の谷々がつづいて見える、郷の中心地でありました。大神は大変喜ばれ、まずここにご先祖の素盞嗚尊（すさのおのみこと）を祭るお宮を立てられ、この山を国造りの中心とされました。大神について来た伊和族の人達は、この山のふもとに住み、田畑を広げ、作物を作りだしました。そのようにして、この神河の地が開けていったので、このあたりを伊和の郷と呼ぶようになったの

目　次

神谷ばなし（一）……森本　一二……1
金谷出土の瑞雲双鸞八花鏡研究史…片山　昭悟……5
奥井記念碑について……深川　定義……8
物資統制のころ……谷井　伴夫……10
安積山遺跡発掘報告……教育委員会……11
平成二十年度研修旅行に参加して…宗平　圭司……15
山崎歴史街道（十七）……会　報　部……16
会長再任にあたって……春名　俊夫……18
事務局だより……19
平成二十一・二十二年度役員名簿……20

です。

ところがこの頃、朝鮮から渡って来た、天の日槍（あめのひぼこ）という神様が、揖保川の下流に上陸し、土地を求めて攻めあがって来ました。大神はこの山に陣地を置き、何度も何度も戦いましたが、日槍の軍も強くて、とうとう川戸までも占領するほどでした。また、ある時は、思いもかけないのに波賀町の方まで攻め込んだりして、大神も大変苦戦されたので、話し合いをして、一宮町三方の志爾嶽（しにのだけ）という山に登って、カズラに石をつけて投げ合って国を決めることにしました。大神の投げたカズラは、三つとも南の方に落ち、日槍のカズラは北の国に落ちました。そこで、大神は南の播磨の国、日槍は北の但馬の国を取ることになりました。

この長い戦いの間、大神はこの山の頂上の平地を城にし、父の素盞嗚尊をおまつりされたので、『都がなる』といって、伊和族の中心の都となったのです。

この都がなるは岸田のお宮の頂上ですが、河東北部の三谷・神谷・矢原・岸田・野々上の五ヶ村出会いの山のうえになります。このことからもこの山の上が、都として大切な所であることがわかるでしょう。

第二話　所名の起こり

都がなるは、ご先祖の素盞嗚尊のお社があり、戦いの間はお城になっていたので、たくさんの人が集まりました。

ご飯に炊くお米もたくさん入り用です。ふもとから籾を運んで山の上でついて米にしました。この時、たくさんの糠（ぬか）が飛びました。この粉が西の谷を白くするほど落ちました。

そこで、この谷を粉谷とよびました。粉谷が神谷（こうだに）となったのです。

一三〇〇年も昔の、風土記という本には『稲春岑（いなつきのみね）・大神がこの岑で稲をつかれたので稲春前（いなつきのさき）という、その糠の飛んでいった所を糠前（ぬかざき）と名づけた』と書いてあります。

この糠という字は、糠（こう）と呼びます。糠（こう）の落ちた谷ですから・こう谷・神谷になったのです。神谷という地名はこのようにして、古い古い大昔から続いているのです。

臼で搗（つ）いた米を糠と選り分けるには、箕（み）でさびます。ところが、急な山の上ですので、その箕がころころと転んで落ちました。その箕が落ちた所を箕谷（みたに）・三谷と呼びました。三谷の地名はこのようにして出来ました。

さて、大神は長い戦いがすんだので、山から下りて国巡りに出られました。すると、大きな鹿が舌を出して飛んで来ました。見るとその舌に矢が刺さっていました。そこで、この辺りを宍（しし）の多いい所、宍禾の郡（しさわのこおり）名をつけ、その村を矢田村と名づけられた。これは風土記の宍粟郡の一番初めに出ていることです。ところで、五十波のお宮さん（野口神社）の言い伝えでは、大神が山を下りられ、矢の立った猪に出会われ『矢

はその腹にあり』と、おっしゃったので、その所名を矢腹と呼ぶようになったが、それがいつか矢原に変わって来たのだ。と、本に書いておられます。

都がなる・稲つきの岑（みね）を山の尾根つたいに下りた所の矢原が、宍粟郡の初めであり、その所名が今に続いているのです。

山崎町史を見ると、矢原・岸田・野々上には、この都がなるから下りた所にたくさんの古墳があると出ています。更に矢原遺跡はもっと古いものだと書いてあります。

私たちの住んでいる河東北部が伊和の大神が都とされた所であり、伊和族の中心地で、伊和の里と呼ばれ、矢原・神谷・三谷などの所名がその頃からのものだというのは、なんと楽しい事ではありませんか。

第三話　伊和から‥石作里へ

伊和の大神が、ここ神河の地を本拠に国造りをされたのは、風土記の出来た奈良時代からは何百年も昔のことです。

この長い間に、大和朝廷の勢力が伸びてきて、七世紀の中頃になると、揖保川の下流に揖保郡が出来、上流地には宍粟郡が作られました。それにつれて大和系の人達が里長（さとおさ）になり、出雲系の伊和族の人達は北の方に移って行ったのです。

（前にも引用した野口神社の伝承によると）

伊和族の本拠にしていたこの神河の地にも、大和系の支族・山部氏の勢力が伸び、その支族恒郷が入ってきました。

そこで「都がなる」で伊和族の神を祭っていた御垣守りが、夜半にこっそりと、御神体を波賀へ移そうと山を下りたのです。これを知った神河の伊和族たちは、御神体を取り戻そうと追って行き、一宮町の須行目（名）で追いつき、奪い合いとなり、遂には御神爾を分けて各村へ持ち帰りました。これによって「都がなる」のお宮はなくなり、各村々にお宮さんを作り、伊和族の先祖の素盞嗚尊をお祭りすることになったのです。

六七〇年、天智天皇は戸籍を造り、地方政治を整備されたのですが、この年にここに住んでいた大和系の石作首（いしつくりのおびと）の名を取って、石作里と里名が付けられたのです。

第四話　素盞嗚尊と牛頭天王

播磨国風土記ができた奈良時代の終り頃、時の大臣であった吉備真備という人が、とんでもないことを言い出したのです。

『日本の神々は、もとは印度の仏さんである。たとえば、天照大神は大日如来の生まれ代わりであり、素盞嗚尊は牛頭天王、月読命は月光菩薩がこの国に生まれ変わられたのだから、日本の神様をお祭りするより、本来の印度の仏さんをお祭りする方が有り難いのだ』という本地垂跡説（ほんちすいじゃくせつ）と云われるものを説きだしたのです。播州に入ってきた大和系の人達は、お宮さんに出雲系の神々が祭ってあるのは気が悪い、と思っていた所なので、これ幸いと姫路の広峰神社の祭神を、牛頭天王にしてしまったのです。京都の祇園さんも牛頭天王を祭ることになり、

その風潮が広がって行ったのです。

明治四十五年にできた河東村史には、

『牛頭天王は…飾磨郡広峰神社を勧請せり、…初め須賀・矢原・三津の三村より各々人を出して相共に広峰山に至り、一つの幣を請けて帰る。然るに各自皆、我が居村に奉祭せんと欲し、互いに主張して止まず。大悶着を起こし、終に一幣を三所に分詞せりという。中山・蟹が沢の社は、その後又更に分祀せるものなりと伝う。』とでています。神谷と三谷のお宮さんは一貫して素盞嗚尊を祀りつづけています。

日本の神さんが、印度の仏さんの生まれ変わりだなんて妙なことを言ったものですね。でも最近は、おかしいことだと気がついたのか、須賀のお宮さの神様を元の素盞嗚尊に帰しています。

お宮にお参りしたときは、気をつけて、祭神を見てください。

第五話　寺　谷

神様の谷、神谷にはお寺の谷・寺谷という広い山があります。三谷へ行く峠道。坂路を越すと左手、北方へ切れ込んだ大きな谷があります。この谷を寺谷といいます。

谷川にそって登っていくと、最初に話した・稲つきの岑・都がなる、に行けますが、途中から別れて右手、東山に登ると・堂山の寺屋敷・という見晴らしのよい段々のなる地があります。

今はヒノキ林になっていますが、昔はここに大小のお寺がいくつもあってたくさんのお坊さんが住んでおられたそうです。これについても、五十波の野口神社・大部彦吉さんの書かれた・神社記・を読んで見ましょう。

『「都がなる」の東、三谷山と野々上山の接する山の峰に寺屋敷あり、その南西、程遠からざる所に多数の墓石の立ち並べる三段ありて、面積凡そ一反を超え、何時の頃よりなるか知る由もなかれど、明和の年を刻せる墓石ありき。古老の説によれば寺三棟あり、本尊・大日如来・観音菩薩をまつれりしを、大日如来を岸田に移し、七堂を建立、観音菩薩を中村梅勝寺に移し、又桂林寺に移す。尚一寺を野々上に移し、陸雲寺といい、分寺して東雲寺・西雲寺の三寺となりたるも、今は陸雲寺の一寺となれり。都がなると寺谷は、山の峰続にて距離僅かに二丁を出でず。』

これによると、寺屋敷は三谷山と野々上山の接する山の頂上であるようで、私たちが呼んでいる中腹の段々の所とは別にあるようです。平成五年の四月三日、中山神社宮司・大部正勝さん（彦吉さん孫）と、神谷村の総代さんであった衣笠さんと三人で、都がなるに登りました。

今、寺屋敷に立つとヒノキ林で寺の跡とも思えないが、崩れかけてはいてもはっきりと段々に均された平地があり、大小合わせると三つどころではなくたくさんの屋敷跡と思える所がある。これは、寺三棟の外に付属の建物があったのでしょう。

大部さんの神社記では墓石がたくさんあったとありますが、それは何回かの植林の際に片付けたり、埋まったりしたのでしょうか、探したが目につきませんでした。

町文化財発掘作業に出られた衣笠さんが、古い土器片を拾われたが、それがいつ頃のものか私にはわかりません。

段々の西奥に、手のひら大の川石がたくさん積まれた所があり、これがお墓の跡だとすると、亡くなったお坊さんの弟子たちが、揖保川へ下りて形のよい美しくそろった石を拾い、その一つ一つにお経の文字を書いて亡骸を埋めたのか…と思われ、三人よって手を合わせたものです。

しかし、そのほかには何も見つからず、往時の賑わいの跡も土の中に静かに眠ってしまっています。

さて、ここにあったとされる三棟の寺のうち、大日如来は岸田にあり、秀吉が長水城を攻めおとしたとき焼いてしまったのですが、如来の仏像だけは難をのがれ、今に伝わって『お大日さん』として田の中の小さなお堂に祀られています。中村に移られた観音さんは梅勝寺に祀られ、今はケンノ山で小さなお堂になっていますが、「一七世紀（江戸初期）には、屋敷が五畝赦免で盛大な寺があり、船越山瑠璃寺の真言宗でしたが、幕末には庵室同然になった。」と町史にでています。

野々上の三つの寺、陸雲寺・東雲寺・西雲寺も瑠璃寺系の真言宗の寺でしたが、いつのころかなくなり、今の陸雲寺は浄土宗です。

神様の谷（神谷）はまた仏様の谷（寺谷）でもあるのです。善良な信心深い村に育った私たちです。この自覚を忘れないで、日々の生活に生かしたいものですね。

金谷出土の瑞雲双鸞八花鏡研究史

片山昭悟

一、はじめに

兵庫県宍粟市山崎町金谷の金谷一号墳から奈良時代の鏡「瑞雲双鸞八花鏡」が、大正時代に出土している。

奈良時代の鏡は、中国の唐鏡や、唐鏡を原型にして鋳造された鏡や、唐鏡を模倣し日本で鋳造された鏡であり、奈良時代を中心にして約三七〇例が古墳や墳墓、溝、寺院址などから出土し、正倉院宝物はじめ寺院や神社に伝世している。

瑞雲双鸞八花鏡は、奈良時代の鏡の中でも同型鏡は、平城京鏡はじめ十七面と最も多く重要な鏡の一つである。金谷鏡は、東京国立博物館に所蔵されている。

金谷鏡は大正六年（一九一七）に出土して、大正八年（一九一九）四月に柴尾清平氏が東京国立博物館に寄贈されている。

鏡が出土して以来九十二年になり、山崎町金谷字湯舟口の古墳から奈良時代の鏡が出土した当時の状況を知る人は少ない。

奈良時代の鏡が出土した金谷一号墳出土の瑞雲双鸞八花鏡について、平成三年（一九九一）八月十六日に東京国立博物館金工室において原田一敏金工室長のご厚意により観覧させていただいた。

これまで拙ない著『金谷一号墳出土の瑞雲双鸞八花鏡』（一九九二年）などに紹介させていただいている。

金谷鏡を観覧して十八年経過し、次代に伝えたいとの思いから金谷出土の瑞雲双鸞八花鏡の研究史について紹介させていただく。

二、金谷出土の瑞雲双鸞八花鏡研究史

金谷出土の瑞雲双鸞八花鏡については、大正時代に出土し、しかも東京国立博物館に所蔵され、唐式鏡の中でも瑞雲双鸞八花鏡は、もっとも多く出土して奈良時代の重要な鏡の一つであることから、東京芸術大学名誉教授中野政樹先生、杉山洋先生、先学の後藤守一先生、梅原末治先生、岡崎譲治先生、亀井正道先生はじめ多くの先生方が調査されている。

年代順に金谷鏡に関連した文献を紹介させていただく。

最初に取り上げられたのが後藤守一氏で、昭和六年（一九三一）「本邦出土の唐式鏡」『考古学雑誌』第二十一巻十二号に「播磨国宍粟郡城下村大字金谷字湯舟口発掘　花枝雙鸞八花鏡　第四十五図　発見遺跡については明らかでないが、金銀環各一個及び須恵器などを伴出してこれが墳墓たりしことを想はしめられる。面径一〇・九糎　反二粍　面・背面両面共に肌があれている。背文は鋳潰れて明瞭をかくが、鈕を中央に雙鸞相對し、上に雲文、下に花枝を配して内区となし、外区には蝶と雲とを交互においてゐる。」、また、南滋賀出土鏡において播磨国出土のものと全く同一様式であると紹介されている。

昭和十二年（一九三七）には、帝室博物館蔵版『天平地寶』に、「兵庫縣宍粟郡城下村大字金谷字湯舟口出土　円鈕を挟んで双鳳を相對せしめ、上に霞、下に蔓草を配し外区に雲と蝶を交互におく、尚これと同型のものは滋賀縣滋賀郡滋賀村大字南滋賀からも出土してゐる」と紹介されている。

昭和二十五年（一九五〇）には、梅原末治氏が「本邦出土に係る唐式鏡の新資料」『史迹と美術』に「伊勢國桑名郡多度村多度、山ノ神址出土瑞雲双鳳八花鏡　昭和九年十月二十日同地で土器の高坏と共に見出されたものであると云ふ。伊東富太郎氏の手拓本に依ると、播磨國宍粟郡城下村大字金谷で見出された鏡と全く同様な、鋳上りのさまでよくない遺品であることが知られる。然からば舶載品のふみかえしと見るべきであらう。」として金谷出土鏡を紹介されている。

昭和三十五年（一九六〇）には岡崎譲治氏が「神門神社とその同文様鏡について」『大和文化研究』に神門神社の同文様の三面の鏡とともに「蔓草双鳥八花鏡」として湯舟口出土鏡を紹介されている。

「これらと同文の品は滋賀県大津市南滋賀からも出土し、兵庫県宍粟郡城下村大字金谷字湯舟口からも出土している。更に三重県桑名郡多度村多度の山の神址からも出土している。以上のうち兵庫県城下村出土の品は面径一〇・九センチ、縁厚〇・四八センチ、神門よりも〇・七～〇・九センチも小型であり、界圏径でも

三センチ余り小さい」とされている。

昭和三十六年（一九六一）には『天平の地宝』に「瑞雲双鳥八花鏡」として「兵庫県宍粟郡城下村大字金谷字湯舟口出土」が紹介されている。

昭和三十七年（一九六二）には斎藤孝氏が「奈良時代の唐式鏡の諸問題」『史泉』第二十三・二十四号に「墳墓と唐式鏡」として「奈良朝の唐式鏡の用例を考察するにあたって前代との関係において古墳に如何なる方式で副葬されているかをまず観なければならない。（7）花枝双鳳八花鏡　兵庫県宍粟郡城下村大字金谷字湯舟口古墳出土」と紹介されている。

昭和三十九年（一九六四）には中野政樹先生が「奈良時代の鏡　東京国立博物館保管の唐式鏡（7）」『MUSEUM』に瑞雲双鳳八花鏡として「出土地兵庫県宍粟郡城下村大字金谷字湯舟口出土として本邦での踏み返し鏡とされ、宮崎県本庄出土鏡と比較され、一〇パーセントも大きく、金谷出土鏡は、同文様中でも径が一番小さく鋳上りも悪く薄手であり、原型鏡から離れたもので踏み返し量産された鏡の中でも金谷出土鏡は末期的状態を表している」とされている。

昭和四十四年（一九六九）には『東京国立博物館図版目録和鏡編』「図版十七　瑞雲双鸞八花鏡　奈良時代　径十一・〇　縁高〇・三　重一三〇　兵庫県宍粟郡山崎町金谷出土　柴尾清平氏寄贈」と紹介されている。

昭和四十七年度（一九七二）に東京芸術大学名誉教授中野政樹先生は「奈良時代における出土・伝世唐式鏡の基礎資料および同范鏡の分布とその鋳造技術」『東京国立博物館紀要』第八号に「兵庫県宍粟郡山崎町（城下村）大字金谷字湯船口古墳出土瑞雲双鸞八花鏡　鏡背文様は、香取神宮と同じで、同じ文様の鏡は一〇面を算える」と紹介されている。「本鏡を出土した遺跡の性格は明らかではないが、後藤守一「本邦出土の唐鏡」によると、同じ地点から金鐶銀鐶の各一個および須恵器が出土しているところからみて古墳ではないかと推定される。」とされ、全国の瑞雲双鸞八花鏡を集成して紹介されている。

昭和四十八年（一九七三）、鎌谷木三次氏が「金谷古墳出土の唐式鏡」『播磨出土の漢式鏡』に「唐代　瑞雲双鳳八花鏡　本墳に埋葬されてゐた鏡鑑が、過去の漢式鏡の類ではなく、それが唐式鏡であつたことは、時代推移の変遷に伴う唐式鏡の新たな中国からの輸入と併せ見て、注目に値する。本墳が、現在のところ、播磨に於ける鏡鑑出土の最下限に位置した時代の高塚古墳であらうか、鏡鑑副葬の限界を示した墳墓として、その存在と地理的位置を特に注意したいのである。」と紹介されている。

昭和五十六年（一九八一）本村豪章氏は「古墳時代の基礎研究稿」『東京国立博物館紀要』第十六号に「一一三　宍粟郡山崎町大字金谷　元城下村ノ内金谷字湯舟六二四―一七出土、金環一、銀環片一、瓶一、和鏡一、地元　坏八、鉄鏃一括　一九一七年三月開墾　柴尾清平寄贈」と紹介されている。

平成元年（一九八九）に、奈良文化財研究所飛鳥資料館学芸室

長の杉山洋氏が「唐式鏡の生産と流通の考古学」『生産と流通の考古学』に、湯船口鏡として「大正八年四月に柴尾清平氏より東京国立博物館に寄贈された。金環・銀環各一個、須恵器を伴出したとのことである。出土状態などは不明である。墳墓の出土品であろう。中野氏は湯船口古墳出土としているが、古墳出土か否か明らかではない。出土鏡にしては保存は良好である。文様表出は比較的鮮明である。」とされ、全国出土鏡の偏差値平均から霊安寺系列のD段階に入り日本出土鏡中最小の瑞雲双鸞八花鏡とされている。

瑞雲双鸞八花鏡の第一人者である杉山洋氏は、平成二年（一九九〇）に奈良国立文化財研究所第六十六回公開講演会資料『奈良時代の鏡　平城京出土の鏡』に「金谷湯船口古墳出土鏡」として平城京出土鏡ならびに坂田寺出土鏡ともに紹介され、このほか杉山洋『日本の美術　古代の鏡』一九九九（至文堂）にも奈良時代の鏡に金谷鏡を紹介されている。

杉山洋氏は平成十五年（二〇〇三）には、『唐式鏡の研究　飛鳥・奈良時代金属器生産の諸問題』（株式会社鶴山堂出版部）に瑞雲双鸞鏡各説C、金谷鏡（第4―2―4図）に金谷鏡を紹介されている。

このほかにも金子裕之『歴史発掘⑫木簡は語る』講談社一九九六に鏡の鳥として金谷鏡の写真が紹介されている。

以上が金谷出土鏡に関連した文献である。

東京国立博物館に所蔵されていることからこのように奈良時代の唐式鏡および瑞雲双鸞八花鏡の研究において重要な位置で参考文献として図版とともに紹介されている。

三、おわりに

今回、金谷出土の瑞雲双鸞八花鏡研究史について紹介させていただくには、これまで東京芸術大学名誉教授中野政樹先生、東京国立博物館原田一敏金工室長、奈良文化財研究所飛鳥資料館学芸室長杉山洋氏、井口喜晴氏、喜谷美宣先生、亀井正道先生はじめ多く先生方のご指導と有益なご教示をいただき、貴重な資料をご提供いただいた。深く感謝の意を表したい。

奥井記念碑について

深川定義

山崎町片山の天理教蔦沢分教会東側の路傍に「奥井記念碑」と刻した石碑が建てられている。その概要について記す。

正面（東側）には、「奥井記念碑」の五文字がある。

裏面（西側）には、「干時明治卅五年九月上旬　福原謙七謹撰」と刻してある。

北面には、説明文が刻されている。口語文に直して後述する。

南面には、次の通り刻されている。

「井堰係特別尽力者
片山村　深川助右衛門君
谷口　万平君
谷口　虎二郎君
下牧谷村　入江　儀作君
宇野村　神山　儀平君
片山村大工　深川　定吉君」

また、北面台石には「深川卯之助謹書　石工　大砂慶藏、巌、種二」とあり、正面台石には、「発起者　片山村　深川定吉、谷口久太郎、深川三次郎、深川林藏、松原磯松、深川卯之助、　宇野村　神山儀右衛門、香山作太郎」とある。

南面台石には、「下牧谷村　入江儀作、坂田卯三郎、北山伊三郎　上牧谷村　南治作、早川善四郎、長谷川市郎平、淡井重吉」とそれぞれ列記されている。

次に、北面の説明文を口語訳して記す。

本村内、上牧谷村にある奥井の堰は、その灌漑は上牧谷・片山・下牧谷・宇野四ヶ村に係る。その関係はこのように大きいが、洪水或いは旱魃に際して、損害は数えきれない程であった。明治十二年（一八七九）中、片山村片牧重太郎君先んじて意匠をこらし、さく石疎通の良法を発明。長川源藏、香山善右衛門、早川平四郎の三君これに賛同。実施に尽力し、終に完成無比の堅牢井堰となった。これより幾十年、一つの損所も見ず、その益は実に広大である。この年九月関係全村、その功労の偉大なるを偲び、この記念碑を建てる。

碑は高々として磨せず。水は洋々として溢れず涸れず、この功労の経過を略記し、永遠不朽に存することを。

備考…この文中の「井」の字は「ユ」と読む。奥井、井堰の井の字である。

奥井関係面積は昭和初期には上牧谷糸崎、片山、下牧谷クボフ、宇野殿町・構の区域に約二十五町あったが、現在は、工場用地、宅地、道路用地等になり相当減少して、十九町ほどになった。

井堰は、昭和の戦後に、何回か災害復旧工事が行われて、片牧氏が発明した一良法とは、どういうことか一見しては判らない。ただこの堰の特色としては、川に直角に設置せず、斜めに川を堰き止めてあることである。

福原謙七氏について

碑の裏面には福原謙七謹撰とある。福原氏はどういう人なのか。山崎町山崎に所在する福原謙七翁の碑（田健治郎書）及び山崎町史によると、天保十二年（一八四一）八月生まれで、山崎の米商、横野儀右衛門の子とある。儒学をおさめ、士籍に列し、山

崎藩の藩校・思斉館の教授となる。明治一二年（一八七九）より揖東郡長、印南郡長を歴任。のち靖献義塾を興し、子弟を教えた。大阪毎日新聞顧問となり、大正十二年（一九二四）二月六日八十四歳で逝去。

以上、奥井記念碑について書いてみました。このほか蔦沢地区には粟田村長頌徳碑、下牧谷池記念碑、宇野唯称寺があります。

物資統制のころ

谷井伴夫

私たちのように七十歳も過ぎた人たちであれば、少しは記憶にあると思いますが、特に女性の方には思い出が深いのではないかと考えます。男性は戦争に従軍していたり、また、各種の軍需工場等で働いていた人たちには、特別に作業着などが支給されたり、自分だけで事が足りていたので、特に関心がなかったかと思いますが、昭和十二年七月七日の日中戦争以来、戦いが長引くにつれて、何もかも物資が軍需用に廻され、次第に社会生活に支障が出始めてまいります。いわゆる戦時統制です。

昭和十六年八月に「金属類回収令」が公布され、各家庭の鍋や釜まで回収されました。神社やお寺の鐘をはじめ、消防用の半鐘まで回収して、鉄砲や大砲、飛行機、軍艦などに使用されるようになりました。

昭和十七年一月に入ると、「繊維製品配給統制令」が公布され、衣料品は点数切符がなければ衣服や肌着などが手に入らなくなりました。たとえば、都市では大人一人百点、郡部（農村）では八十点が配給されます。大人の背広一着が五十点、ワンピース十五点、ワイシャツ十二点、モンペ十点、足袋五点、靴下一点などだったそうです。

昭和十九年になると、三十歳以上は三十点、三十歳未満の若者は五十点に切り下げられました。しかし、配給する品物がだんだん不足し始めて、点数があっても店に品物がなくなり、なかなか買うことが出来なくなりました。特に早く姿を消したものは絹製品、木綿などで絣や紬類の衣料で、女性（若い娘）がほしい着物や下着類（木綿・晒・ネル）などでした。絹類は落下傘や軍用品になり、綿類・毛皮・革製品もほとんど軍隊に廻されて一般へは届きませんでした。

時を同じくして、食料品にしても配給制になり、農家は供出量が割り出され、米・麦・大豆・栗・イモ類まで供出させられました、農家でも一人一日何kgの割で保有米が決定し、残りは全部供

出しておりました。ほかの食品についても、塩・砂糖・醤油・食油・いりぼしなどあらゆる品が配給になり、酒・たばこも終戦後も続いておりました。隣組で戸数割や人数割で受け渡しがされておりました。

お米は一人一日分が二号一勺だったのですが、その米も遅配になったり、うどん一束が一日分とか、トウモロコシの粒にしたのが、代替配給されたり、農家でも芋粥やサツマイモの葉や茎を入れたりカボチャを入れてお粥にしておりました。都会の人たちは農家を訪れて大事にしていた着物や長襦袢・帯・洋服・革靴などと米・麦・野菜に交換してその日を食い繋いでいたのです。また、若い娘は親の着物などを仕立て直したり、仕事着やモンペ等に仕立てておりました。衣料切符の点数が足りなくなると、隣の家より借りて着物や下着などを買っていたそうですが、それも商店に品物があればのことです。

次の文は、戦中の都会の人や農家の人が読んだ川柳、狂歌、落首の類です。

① 晴れ着二枚と　替えたる芋は　宝物
② 芋粥を　すすりて今日も　過ごすなり
③ 月の夜　あるだけの　米をとぎ
④ 帯一本と麦を少し　替えてもらい戻る道に　涙流れる
⑤ うまうまと　我が革靴を　僅かなる　米と換えしが　いつか報いん
⑥ 都会のやつらも　今度という今度は　有難味がわかっただろう
⑦ いささかの　キビ分かちくれし夜　喜びが　心みたして　一日ありき

①大切な着物とサツマイモを交換したらこの芋は宝物のようだ。②配給米が遅れたので今日は少しある芋でお粥を作り、辛抱して過ごす。③空襲を警戒して消灯しているので、月明かりで米を洗った。④帯一本を少しの麦に換えてもらっての帰り道、情けなくて涙が止まらない。⑤農家にうまくだまされて、大事な革靴を少しの米と交換したが、いつかは見返してやる。⑥これは農家のものが、都会のものも今度は百姓の有難さがわかるであろうと詠っているのです。⑦少しのキビを分けてもらった嬉しさを読んだものです。

農家の百姓も都会の人たちもお互いに戦時中から戦後にかけて苦しい時代でありました。

一宮町安積山遺跡の発掘調査について

宍粟市教育委員会

はじめに

中国山地の東端に連なる宍粟市は、揖保川・千種川水系の清流と豊かな森林をはじめとするさまざまな地域資源に恵まれていま

す。とりわけ市域の北部一帯では、近代にいたるまで良質の砂鉄を原料とする製鉄が盛んに行われていたことが知られています。

宍粟市教育委員会では、平成十八年度から二〇年度にかけて宍粟市林業再生事業の造成工事に伴い、一宮町安積山遺跡の発掘調査を実施しました。このたび現地調査が終了しましたので、これまでの調査で明らかになったことについて概要を報告いたします。

遺跡の位置

安積山遺跡は一宮町神戸地区に所在し、播但国境に源を発する揖保川と波賀町域を貫流する引原川の合流地点の北西約1㎞の地点に位置しています。遺跡は古城山（安積山）の南麓にあたり、東側の金山と西側の丸山との間に挟まれた緩やかな斜面に立地しています。周辺一帯では、以前より土器類や鉄滓の散布が知られており、金山や釜床などの地名から製鉄遺跡の存在が予測されていました。

平成5年度に行われた確認調査では、縄文時代の落とし穴状土坑1基、弥生時代後期とみられる竪穴住居跡1棟などが検出されています。平成6年度には、丸山の東向きの山腹で大型炉6基、小型炉5基、特殊形態炉1基の合計12基の製鉄炉跡が確認され、平安時代末ころを中心とする大規模な製鉄遺跡であることが明らかになりました。

発掘調査の概要

平成十八年度には、谷部の緩斜面に位置する4地点において発掘調査を実施し、北東部の調査区で1基、中央部の調査区で2基の製鉄炉跡が確認されました。いずれも長さ2～2・7m、幅1m前後、深さ10㎝前後の下部構造の土坑を有する小規模なものですが、山腹の急斜面のみでなく谷部の緩斜面にも製鉄炉が営まれていることが明らかとなりました。

平成十九年度には、西側の丸山南部の東向きの山腹において発掘調査を実施し、4基の製鉄炉跡が確認されました。調査区の中央部では、長さ約10m、幅3～4mにわたって段状に平坦面が形成され、その上に斜面と直交して2基の製鉄炉が築かれていました。南側の炉跡は長さ約4・2m、幅約1・3m、深さ20㎝前後の比較的規模の大きな舟底状の土坑を下部構造としています。土坑内には、防湿のために炭や焼土、炉壁片などが充填され、それらは固く叩き締められていました。炉床部には炉壁片が残されていましたが、炉本体の規模や構造については明らかではありません。また炉跡の下方には、操業時に排出された多量の鉄滓や炉壁片などが堆積していました。平坦面北側の炉跡は、長さ約1・2m、幅約0・6mの下部構造の土坑を有する小規模なものです。また、平坦面の南東下方では、長さ約3・1m、幅約1・1mの土坑を下部構造とするさらにもう1基の製鉄炉跡が検出されました。

平成二十年度は、一転して谷部を挟んだ東側の金山の西向き山

腹で発掘調査を実施したところ、ここでも3基の製鉄炉跡が確認されました。南調査区の炉跡は長さ約8ｍ、幅約4ｍの平坦面を削り出した上に築かれていました。長さ約7・5ｍ、幅約1・5ｍ、深さ20～30㎝の下部構造の土坑を有し、長軸の両端には長径1・5～2・4ｍ、短径1・2～1・4ｍ、深さ40～50㎝の土坑が掘り込まれていました。炉の下部構造の土坑内には防湿のための炭、焼土、鉄滓などが交互に充填されていました。炉床部には、炉壁片や鉄滓が残されていましたが、炉本体の規模や構造については明らかではありません。炉跡の下方には、操業時に排出された鉄滓や炉壁片などが堆積していました。

製鉄炉跡の上方に接して長径6・5ｍ、短径4・5ｍの二段掘りの土坑が検出されました。土坑の壁面は固く焼け締まっており、詳細は不明ながら炭窯に類するものではないかと考えられますが、製鉄炉跡との関連については明らかではありません。

金山の北西麓にあたる北調査区の狭い急斜面の上からも2基の製鉄炉跡が確認されました。いずれも長さ2・7～3・1ｍ、幅1・3～2ｍの下部構造の土坑を有し、小規模な炉本体が想定されます。2基の製鉄炉跡の南西下方には、長さ約15ｍ、幅約10ｍの平坦地が確認され、あるいは製鉄に伴う作業場的な機能を有していたものかも知れません。

また、南調査区の西向きの山腹斜面において、竪穴住居跡2棟が確認されました。いずれも斜面上方の壁面と床面の一部が検出されたもので、一辺7ｍ前後を測る隅円方形の竪穴住居跡とみられます。斜面下方は上方の掘削土を埋め出して床面を成形していたものが、後世に流出してしまったものと考えられます。また、2棟の竪穴住居跡の西側下方では、幅2ｍ前後の溝が約10ｍにわたって検出されました。竪穴住居跡、溝跡からは少量ながら弥生時代後期の土器が出土しています。

まとめにかえて

平成6年度の発掘調査に続き、今回の調査においても谷部の緩斜面で3基、丸山南部の山腹で4基、金山の山腹で3基の合計10基に及ぶ製鉄炉跡が確認されました。しかしながら、一つの地点で検出される炉跡は2～4基と少なく、いずれも点在的な感をまぬがれません。また、炉の地下構造となる土坑も比較的小規模なものが多いようです。このことから平成6年度の調査区が安積山遺跡の一大中心部であることは動かしがたく、ここを中心に周辺一帯の山腹斜面や谷部で立地を移しながら小規模な製鉄炉が継続して営まれたものと想定されます。遺跡の性格上、年代の手がかりとなる土器類の出土は限られていますが、現在のところこれらの製鉄炉はおおむね平安時代の末から中世の初めにかけて営まれたものと考えられます。

今回確認された製鉄炉跡は、下部構造の土坑の形状からいずれも中国山地に類例の多い「長方形箱型炉」と呼ばれる形態のものと考えられます。その中で、平成二十年度南調査区で確認された長軸の両端部に楕円形の土坑を有する形態の炉跡は、少なくとも

安積山遺跡でははじめての検出例として注目されるものです。

奈良時代の初めに成立したとされる『播磨国風土記』宍禾郡の条に、柏野里の敷草村と御方里の金内川で「鐵を生す」と記されていることから、宍粟北部の製鉄が古代に遡る可能性を示唆しています。また、中世以降は千草鉄・千草鋼の名が広く知れ渡り、江戸時代には千種町・波賀町・一宮町北部一帯で「たたら製鉄」が盛行したことが知られています。安積山遺跡の製鉄炉群は、まさに古代から中世の転換期における播磨北部の製鉄史の変遷を探るうえで重要な位置を占める遺跡であると評価することができます。

今後は、出土遺物の整理や分析と合わせて、製鉄炉跡の形態や構造の技術的な系譜、原料の砂鉄や燃料の木炭の供給形態、精錬や鍛冶工程への流通、さらには大規模な製鉄炉群の経営主体の解明などを進める必要があります。

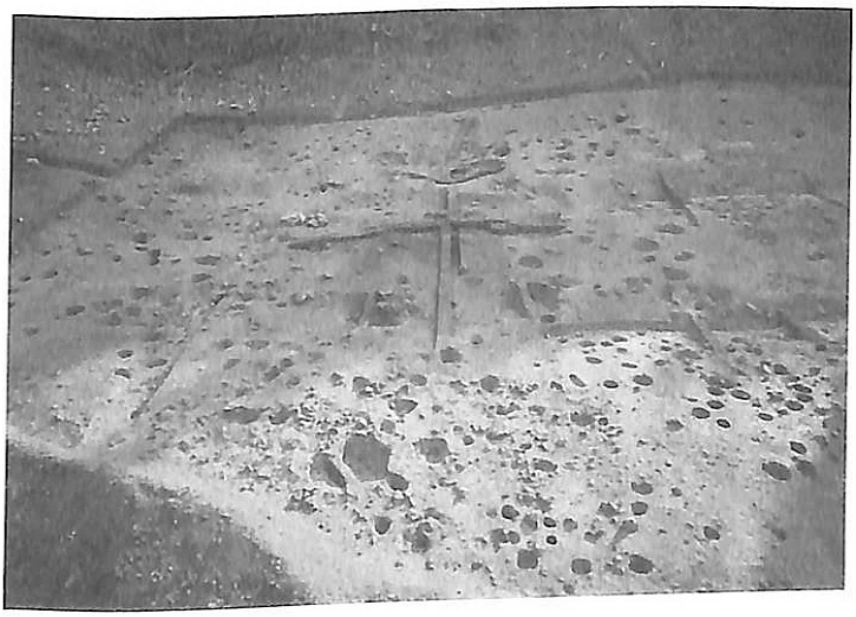
最後になりましたが、発掘調査の実施にあたってご理解とご協力をいただいた関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

（文責　田路正幸）

参考文献

・一宮町史編集委員会編　一九八五　『一宮町史』　一宮町
・兵庫県教育委員会編　一九九四　『製鉄遺跡Ⅱ』（『兵庫県生産遺跡調査報告』第5冊）　兵庫県教育委員会
・一宮町教育委員会編　一九九六　（『安積山遺跡―第2次発掘調査の記録』（『一宮町文化財調査報告』9）　一宮町教育委会
・土佐雅彦　一九九七　「播磨の鉄」（『風土記の考古学』②―『播磨国風土記』の巻）　同成社
・土佐雅彦　一九九九　「播磨を支えた古代の鉄」（『地中に眠る古代の播磨』）　神戸新聞総合出版センター
・宇野正碌二〇〇六　『宍粟鉄の軌跡を逐う―千草鉄山史話』（地域史・栄光と影・随想第二編）

安積山遺跡平成20年度南調査区全景（西から）



平成二十年度研修旅行に参加して

事務局　宗　平　圭　司

晴天にめぐまれた昨秋十月二日、今年度研修旅行は三十四名が次の四か所を巡った。

◇県立考古博物館（播磨町）

幸運にも文化庁主催の「二〇〇八年発掘された日本列島」展が開催されており、貴重な内容の展示の数々を見ることが出来た。中でも高松塚古墳の壁画にカビの発生や劣化が進行し、この保存と修理のための石室の解体作業が実施された様子や、墳丘の構築方法等新たに確認された古代技術が紹介されていた。

また実物大の石室が作られており、その中を通り、左右・天井の壁画を見て改めて感動した。

次に世界遺産の石見銀山遺跡から、出土品だけでなく地図や絵図を含め、往事の石見銀山の様子を見ることができた。

その他にも数点全国各地よりの出土品が展示され、当館の学芸員より丁寧に説明をしていただいた。

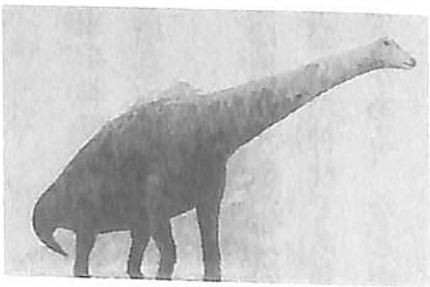
◇大中遺跡・篠山城址（省略）

◇丹波恐竜発掘現場（丹波市丹南町）

丹波市でのこの発掘は、全国的に注目を集めている。当日第一発見者の村上茂氏に現地におこし頂き、平成十八年八月七日世紀の大発見の様子を詳しく説明していただいた。

長年、生痕化石の調査を続けてきた足立きよし氏と旧友の村上茂氏（共に丹波市在住）は、同日二人で山南町上滝の川代渓谷へ地質調査に出かけた。その日は、美しい渓谷に夏の太陽が照りつける暑い日であった。

折り重なる篠山層群の赤茶けた泥岩層の表面から、一センチほど突き出た灰色がかった石のようなものを村上氏が発見。二人でハンマーやタガネを使い切片二本を堀り出した。翌日も時間をかけて、約三十センチある肋骨の切片二個、尾椎一個を含む五個の化石を発見した。これを八月九日三田市の県立人と自然の博物館へ持参した。絶滅した大型哺乳類の化石に詳しい当館の三枝春生主任研究員は、最初から信用せず見ることさえ拒んだ。再三お願いした結果、やっと包みを解くと一目で恐竜化石と判明、館内騒然となった。三枝氏他は直ちに現地に向かい埋蔵状態を確認した。



同年九月二十七日から三日間、県立人と自然の博物館の研究員等数名で試掘の結果、恐竜化石十数点を採集した。

村上氏の詳しい現場での解説が、予定の時間をオーバーして、質疑も長時間におよんだ。

◇その後、二十年十二月より二十一年三月の間、第三次発掘調査が実施され、全長約二十七メートルの草食恐竜の首や大腿骨の発見が期待されていたようだが、見つかった物は歯が六本ほか化石

約二千八百点であった。

また同時に、鳥脚類と見られる草食恐竜と肉食恐竜の歯計四十点も発見。同じ場所から数種類の恐竜化石が見つかっており、他の恐竜の分類にも役立つものと思われる。

今後第四次の発掘が予定されており、さらに多くの化石が発見されることが期待されるところである。

丹波市役所では、「恐竜を活かした町づくり課」を設置し、市をあげて町おこし・村おこしに取り組んでいる。豊岡市のこうのとりと共に、丹波の恐竜ブームは当分続くものと思う。

一億三千年～四千年前のロマンに浸りつつ、有意義な研修を終え帰路についた。

（写真は最初に発見された化石。丹波市山南町上滝　川代にて）

『山崎歴史街道』（十七）

●山崎の史跡巡りをしませんか●

会報部

五十二、桓武伊和神社と社叢

奈良平城京から長岡京そして京都平安京へ遷都された桓武天皇にまつわる伝説がこの都多の地、桓武伊和神社にあります。

（一）桓武伊和神社　　所在地　山崎町中野

都多小学校隣接地に、桓武伊和神社があります。

神社由緒沿革によると、祭神は、桓武天皇・伊邪那岐大神・須佐之男大神です。

また、第五十代桓武天皇がこの地に狩りに来られて崩御され、葬られ、御廟所にまつられた。裏山は葬られし墳墓で円墳になっている。とあります。

山崎町史にも、伝説として、桓武伊和神社は桓武天皇がこの地に来遊し、ここで死去したまい、神として奉祭した神社であり、神社の裏山には天皇の墳墓があるという言い伝えがある。などが記されています。

また、郷土研究会誌には天皇御陵の伝説のある裏山地を、昭和八年一月から発掘されたが既に盗掘の後であった。それでも頂上の石室の周囲には、葺石という球形の石が多数ならべられ、又厚

さ幅とも約一メートルの美しい粘土層が環状に埋められ、外周には堀の跡があった。そしてまた、当時来村された元宮内省諸陵寮の和田千吉博士、内務省の国村犀東博士らの指示により、近くの経納山を掘ると山吹双雀鏡や燈釜、古銭等貴重な埋蔵品が発掘された。と記載されています。

また境内には神社には珍しい梵鐘があり、この梵鐘にも下記のように祭神は第五十代桓武天皇である等が鋳造されています。

梵鐘陰刻銘文　町史より

夫　当宮者人皇五十代桓武天皇也　延歴改元壬戌退秋　王室
在御幸于此地而不経幾春秋而終崩御於此境給　即谷中三ヶ村
奉祭礼氏神　以来至今居諸凡得九百三十三年　神功広大
神徳増盛　臨時祈誓　則現直無不蒙感応

また、銘文は続いて、正徳二年（一七一二）の鐘が破損したので新鋳したことにもふれています。

（二）早良神社

境内には、また、早良（さわら）神社が祭られています。山崎町史等によると、祭神は早良親王（桓武天皇の実弟）。追号されて崇道天皇とよばれた。

早良親王は、桓武天皇が平城京から長岡京へ遷都の際、長岡京造営に当たっていた藤原種継が工事視察中に暗殺された。犯人首謀者は大伴家持。早良親王もその一味として捕らえられ、淡路流罪の途中、無罪の罪に抗議して絶食したこともあり、高瀬舟において亡くなり、遺骨は淡路に運び葬られた。と言うことです。

（三）桓武伊和神社仏像（三体）

神社境内の山麓に仏像が三体安置されています。中央に大日如来、あと広目天・持国天二体の立像ですが、いずれも大変老朽化しています。

しかし、その仏像から様々な歴史を感じ取ることができます。

町史に、元禄六年（一六九三）の『宍粟郡玉帳』によると、として、徳王寺の寺域は桓武伊和神社の南西隅にあったともいい、桓武伊和神社の神宮寺だとも伝えられる。と記されています。

また、山崎町文化財シリーズ（昭和六十年三月）には「桓武伊和神社仏像三体」「古くより桓武伊和神社にあり、平安中期の四天王の木像であると伝えられているが、残念なことに、かなり老朽化している。」とあります。

してみるとこれらの仏像は明治元年（一八六八）の神仏分離令やその時起こった廃仏毀釈の影響を受けたのではないかとも考えられます。

（四）桓武伊和神社叢　（市指定天然記念物）

桓武伊和神社の裏山は社域でもあり保存状態が良く、暖帯樹林としてのシラカシ・アラカシ・イチイガシ・スギ・タラヨウ・ヤ

ブツバキ等の樹林やハチジョウザサ・チトセカズラ・フウラン等の珍しい草本類が群生していました。生物学上非常に珍しいものがありましたが、昨今は姿を消したものもあり惜しまれます。

桓武伊和神社

会長再任にあたって

春名俊夫

花はいつしか過ぎ葉桜の季節となりました、皆々様にはご健勝でおすごしのこととお喜びもうしあげます。　さて、私ことさる三月八日の郷土研究会の総会で、会長の重責を再びはたすことになりました。

常日頃は本会の事業に、御協力をたまわり深謝申し上げます。

私も本会の発展に微力を尽くしてまいりますが、皆々様の、ご協力がなければすすめて行くことができません。会の発展は、会員の増加が何よりです、隣近所、また、知り合いの方々に新規ご加入をすすめてくださいますよう、お願いもうしあげます。

つぎに本会では、以前から宍粟橋より上流の河川改修に伴う史跡の保存を関係各所にお願いや陳情書の提出などをおこなってまいりました。昨年度より市や国土交通省と色々協議する場ができまして郷土研究会より私が協議の場に出てまいりました。三月二十三日に市としての意見が九十％程度できまして、階段の一段を登ることになったかなという事になりました。

その概要を少し述べます。

名前「揖保川　かわまちづくり整備計画」

まえおき省略し　計画課題（思い）一、水辺と調和した歴史的遺構の保全　二、憩い・文化・情報の中心拠点として水辺を利用し

たにぎわい空間の創出　三、水辺空間を活用した多くの市民が利用することができるオープンスペースの創出

「水辺の歴史ゾーン」は水辺沿いに残された歴史的遺構（問屋街の跡の石積み、高瀬舟舟着場跡、浜御殿跡）を散策路によって結び、川沿いに暮らしてきた人々の生活と水辺の関わりを知ることができるゾーンとする。

問屋街跡の石積み復元　当時の町並みと川の関わりを知ることができるよう現況の位置で表現する。

浜御殿跡　問屋街と同じく

船着場跡　両岸に現状のまま修復する。

護岸の頂部は散策路としてサクラを植栽する。名称は「歴史の道」とする。

以上

事務局だより

平成二十一年度の通常総会が開催されました

去る三月八日（日）午後二時より、宍粟防災センター五階ホールにおいて開催され、二十年度の諸事項報告及び二十一年度の事業計画等が承認されました。

次に、会則の一部改正が提案され、第十三条会計年度区分において、暦年度を、「毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日終わる」と改正することが承認されました。

又、役員の改選について、今年は改選の年にあたるため選考委員による選考の結果、会長以下現在の役員が再任されました。

総会終了後、記念講演にかえてＶＴＲ「播磨一宮伊和神社一つ山大祭」を鑑賞しました。

二十一年度研修旅行のお知らせ

予定日　十月一日（木）　行き先計画中

昨年好評を得ました丹波恐竜発掘現場見学同様、今年も多数の参加が得られるような内容・行き先を検討中です。

訃　報

本会会報部委員として、永年にわたりご貢献頂いた藤村清一様が、去る一月十四日ご逝去されました。ここに謹んで、ご冥福をお祈り申し上げます。

役員名簿　平成二十一・二十二年度

役職名	氏名	住所	電話
名誉顧問	藤井　慧乗		
会長	春名　俊夫		
副会長	浅田　耕三		
事務局長	宗平　圭司		
会報部長	大谷　司郎		
研修部長	金山　敞史		
史跡部長	伊野　操治		
山崎地区西支部長	木山　延二		
山崎地区東支部長	柳田　弘		
山崎地区北支部長	伊野　操治		
城下地区支部長	片山　英之		
戸原地区支部長	金山　敞史		
河東地区支部長	衣笠弘一郎		
神野地区支部長	春名　俊夫		
蔦沢地区支部長	宗平　圭司		
菅野地区支部長	河本　雅視		
土万地区支部長	赤松　茂毅		
監事	河本　雅視		
監事	三宅　保雄		

平成二十・二十一年度　各部構成

会報部長　大谷司郎
- 河本　雅視
- 浅田　耕三
- 片山　昭悟
- 鎌田　裕明

研修部長　金山敞史
- 木山　延二
- 垣口ちゑ子
- 西川　博敏
- 宗平　圭司

史跡部長　伊野操治
- 伊藤　一郎
- 柳田　弘
- 横野　正浩

PHOTO-STUDIO
Ueyama
P.C.S
スタジオウエヤマ

●山崎店　兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL(0790)62-8027
FAX(0790)62-8827

心のゆとりのおてつだい
安井書店
YASUI BOOKS

本　　店　TEL(0790)62-0700
さつき通り　FAX(0790)62-2117
ブックランド店　TEL(0790)64-2051
山崎町中井　FAX(0790)64-2052

パンフレット・デザイン広告・名刺・封筒・伝票
新聞広報誌・ポスター・案内状・シール等

(有)稲田印刷

〈本　社〉〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL(0790)62-0254 FAX(0790)62-4764
〈一宮店〉〒671-4133 兵庫県宍粟市一宮町須行名496
TEL(0790)72-8600 FAX(0790)72-8611

清酒
山陽盃
SANYO HAI
兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造有限会社

JCA
コスモ旅行株式会社

兵庫県知事登録業第2-304号
(社)全国旅行業協会会員　一般旅行業務取扱主任　三木素尊

兵庫県宍粟市山崎町中井7番地の4(咲ランド1階)
TEL(0790)63-0075
FAX(0790)63-0077

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を
御菓子司 あらき
本　店・播州山崎町さつき通り　電162-0170

外科・内科
山中医院
院長　山中陽一

山崎町西町・TEL(62)0036

生谷温泉(いぎだに)伊沢の里

いつも伊沢の里をご利用くださいましてありがとうございます。心から感謝を申し上げます。
これからも、是非、お祝い、ご法要、ご会食、団欒など会席料理から鍋物、そして定食など、なんなりと是非お申し付けくださいませ。ご予算に応じて調理させていただきます。
また、無料送迎バスもご利用ください。
おいでをお待ちいたしております。

Tel.0790-63-1380　Fax.0790-63-0362